



Title	チュヴァシ語における /r/ 始まりの異形態と /l/ 始まりの異形態の交替について
Author(s)	菱山, 湧人
Citation	北方言語研究, 12, 53-67
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/84908">http://hdl.handle.net/2115/84908</a>
Type	bulletin (article)
File Information	06_Hishiyama.pdf



[Instructions for use](#)

## チュヴァシ語における /r/ 始まりの異形態と /t/ 始まりの異形態の交替について

菱山 湧人

(東京外国語大学非常勤講師)

キーワード: チュヴァシ語、形態音韻論、交替、ロータシズム

### 0. はじめに

チュヴァシ語 (チュルク諸語オグル語群)<sup>1</sup>の過去接辞 -R、位格接辞 -RA と奪格接辞 -RAn は、接辞頭で /r/ と /t/ が交替する<sup>2</sup> (例: *kay-r-äm* 「私は行った」、*kil-t-ëm* 「私は来た」、*šiv-ra* 「水で」、*tävar-ta* 「塩で」、*külë-ren* 「湖から」、*värman-tan* 「森から」)。比較接辞は、/r/ 始まりの短形 -rAx と /t/ 始まりの長形 -tArAx が交替する<sup>3</sup> (例: *xitre-rex* 「より美しい」、*načar-tarax* 「より悪い」)。

過去接辞については、いずれの先行研究も /r, l, n/ で終わる語の後には -t が現れ (三人称接辞の前では -č)、それ以外の場合は -r が現れるとしている。位格接辞と奪格接辞について、一部の先行研究は /r, l, n/ で終わる語の後には /t/ 始まりの異形態 -tA, -tAn が現れ、それ以外の音で終わる語には /r/ 始まりの異形態 -rA, -rAn が現れるとしている。別の先行研究は、/l, n/ で終わる一部の語には /r/ 始まりの異形態も現れうるとしている。比較接辞について先行研究は、/r/ で終わる語には /t/ 始まりの異形態 -tArAx が現れ、/l, n, y, m/ (/l, n/ または /l, n, m/ とする先行研究もある) で終わる語にはいずれの異形態も現れ、その他の音で終わる語には /r/ 始まりの異形態 -rAx が現れるとしている。しかし、揺れが見られる場合の異形態の出現頻度に関する記述は見当たらない。

本稿<sup>4</sup>ではまず、コーパスを用いた定量的調査の結果から、語末音による /t/ 始まりの異形態の全体的な出現頻度は、「/r, l, n/ > 他」(過去接辞)、「/r/ > /l/ > /n/ > 他」(位格・奪格接辞)、「/r/ > /l/ > /n/ > /y, m/ > 他」(比較接辞)であることを示し、この傾向が、語末音の /r/ との音声的類似性の高さと相関していることを示す。

次に、チュヴァシ語において以下のような通時的発展が起こった可能性を提示する。他の多くのチュルク諸語で過去接辞および位格・奪格接辞の形式は /d, t/ 始まりであることから、後にチュヴァシ語に発展した言語の過去接辞および位格・奪格接辞の頭子音では、/d/ > /r/ の変化 (ロータシズム) が起こった (ただし歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後では接辞頭の /t/ が生き残った) 可能性がある。一方、比較接辞は、他の多くのチュルク諸語でも -rAx に類似の形式が現れることなどから、-tArAx は形態素境界で /r/ が連続するのを防ぐために、上

<sup>1</sup> 8 個の母音音素 /a, e, ä, ě, ĩ, i, u, ü/ と、14 個の子音音素 /p, m, v, t, s, n, l, r, š, č, ś, y, k, x/ を持つ (Clark 1998: 435)。無声子音は、母音間や、共鳴音の後で母音の前に立つときは、有声の異音を持つ (庄垣内 1989: 871)。

<sup>2</sup> 子音交替と母音調和による異形態 (位格: -ra/-re, -ta/-te (-če)、奪格 -ran/-ren, -tan/-ten (-čen)、過去 -r, -t (-č)) を持つ。本文中では適宜、交替する部分を大文字で表した代表形を用いる。

<sup>3</sup> 母音調和による異形態 (短形 -rax/-rex, 長形 -tarax/-terex) を持つ。

<sup>4</sup> 本稿の草稿は、日本言語学会第 161 回大会および日本北方言語学会第 4 回大会で発表し、参加者の方々から貴重なコメントを賜った。ここに記して感謝申し上げたい。有益なコメントを下された 2 名の査読者にもお礼申し上げたい。ただし、本稿における誤謬は全て筆者の責に帰するものである。

述のロータシズムよりも後に緩衝音節 tA が挿入されて形成されたと考えられる。これらの説は、本稿で示す調査結果からも支持される。

本稿の構成は次の通りである。まず第 1 節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第 2 節で調査方法と調査結果について述べ、第 3 節で考察を行う。最後に第 4 節で本稿の内容をまとめ、今後の課題を挙げる。

なお、外国語文献の日本語訳、ラテン文字転写<sup>5</sup>、文字飾り、図表、図表番号は特にことわりのない限り筆者によるものである。

## 1. 先行研究

本節では、1.1 節で過去接辞、1.2 節で位格・奪格接辞、1.3 節で比較接辞についての Krueger (1961), Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012), Pavlov (2014a, b) の記述をまとめ、1.4 節で問題提起を行う。

### 1.1. 過去接辞

Krueger (1961: 144) は、過去接辞の異形態について、母音と /l, n, r/ 以外の子音の後には -r が、/l, n, r/ の後には -t (ただし三人称接辞の前では -č) が現れるとしている (例: vula-r-ām 「私は読んだ」、šir-t-ām 「私は書いた」、šir-č-ě 「彼／彼女は書いた」、kil-t-ēm 「私は来た」、kil-č-ě 「彼／彼女は来た」)。Krueger (1961: 145) は、これらの形態音韻論的交替が、位格のそれと類似していることを指摘している。

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 363-364) は、過去接辞が -r(-t, -č) であるとした上で、/l, n, r/ で終わる動詞語幹 (一・二人称) には -t が現れ (例: irěl-t-ēm 「私は溶けた」、šan-t-ām 「私は信じた」、šār-t-ām 「私はこねた」)、三人称では -t の代わりに -č が現れる (例: irěl-č-ě 「それは溶けた」、šan-č-ě 「彼／彼女は信じた」、šār-č-ě 「彼／彼女はこねた」) としている。加えて、r で終わる一部の動詞では r が落ちることについて言及している (例: par- 「与える」 > pa-t-ām 「私は与えた」、per- 「投げる」 > pe-t-ēm 「私は投げた」、pe-č-ě 「彼／彼女は投げた」)。

Pavlov (2014b: 253) は、過去接辞が -r(-t, -č) であるとした上で、-r- はチュヴァシ語に特有であり、すべての母音と大半の子音 (l, n, r を除く) の後に現れる (例: ěšle-r-ēm 「私は働いた」) としている。続けて Pavlov (2014b: 253) は、他のチュルク諸語では d であり、チュヴァシ語で -t- は l, n, r の後 (一・二人称) で現れる (例: šir-t-ām 「私は書いた」) と述べている。Pavlov (2014b: 253) によると、-t- は明らかに共通チュルク語の祖形 -d- に遡る。Pavlov (2014b: 254) は、三人称接辞の前では -t- が -č- に交替するとしている (例: kan-t-ām 「私は休んだ」、kan-č-ě 「彼／彼女は休んだ」)。

### 1.2. 位格・奪格接辞

Krueger (1961: 105-106) は位格 -RA の異形態について、母音と /l, n, r/ 以外の子音の後に

<sup>5</sup> ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

は -rA が (例 : küle-re 「湖で」、šiv-ra 「水で」、/l, n, r/ の後には -tA が (例 : Atäl-ta 「ヴォルガ川で」、värman-ta 「森で」、所有と複数の接辞の後には -če が (例 : aläk-sen-če 「ドア (複数) で」 <\*aläk-sen-te)、三人称所有接辞の後には -nče が現れるとしている。Krueger (1961: 106) は、代名詞にもやや似た語尾が用いられるが、man-ra 「私のところで」は n+r となることに注意されたいと述べている。Krueger (1961: 107) は奪格について、末尾に -n が付いていることを除いて、位格の場合と全く同じであるとしている。

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は、位格のどの異形態が現れるかは語末音によるとし、次の4つのパターンを挙げている。1) r 終わりの名詞には -tA が付く (例 : tävar-ta 「塩で」、2) l, n, l', n' 終わりの名詞には -tA または -rA が付く (例 : kukäl'-te / kukäl'-re 「ピロシキで」、3) 他の音で終わる名詞には -rA が付く (例 : küle-re 「湖で」、4) 複数名詞には -če が付く (例 : ača-sen-če 「子供たちのところで」)。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は、所有形の名詞に付く位格は、人称によって異なる異形態が、つまり一人称には -rA が (例 : tus-äm-ra 「私の友達のところで」、二人称には -tA が (例 : tus-u-n-ta 「君の友達のところで」、三人称には -če が (例 : tus-ě-n-če 「彼／彼女の友達のところで」) 付く (二人称と三人称の所有接辞と格接辞の間には子音 n が挿入される) と述べている。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は奪格について、どの異形態が付くかは位格と同様であるとしている (例 : kākār-tan 「胸から」、kukäl'-ten / kukäl'-ren 「ピロシキから」、lašaran 「馬から」)。

Pavlov (2014a: 21-22) は位格と奪格の異形態について、/l, n/ で終わる語のうち、固有語には原則として /t/ 始まりの (例 : Xusan-ta 「カザンで」、借用語には多くの場合 /r/ 始まりの異形態が後続するとしている。Pavlov (2014b: 70, 71) は、-r, -r', -l, -l', -n, -n' を末尾に持つ固有名詞は -tA と -tAn を、その他の音を末尾に持つ場合は -rA と -rAn の形式をとり (例 : tävar-ta 「塩で」、mäkän'-ten 「けし (植物名) から」、xula-ra 「街で」、pürt-ren 「家から」、l, n で終わる借用語の場合は両方の異形態の使用が可能であるとしている (例 : rajon-ra / rajon-ta 「郡で」、vokzal-ra / vokzal-ta 「駅で」)。

### 1.3. 比較接辞

Krueger (1961: 125-126) は、比較接辞の異形態について、1) 母音または -r 以外の子音で終わる語幹は、異形態 -rAx を用いる (例 : sarä-rax 「より黄色い」、xitre-rex 「より美しい」、2) -r で終わる語幹は、異形態 -tArAx を用いる (例 : yivär-tarax 「より重い／難しい」、načar-tarax 「より悪い」。ただし、nummay-tarax 「より多い」のような例がある)、3) -l と -n で終わる語幹は、両異形態の間で自由に変異する (例 : avan-tarax 「よりよい」、としている。

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 314-315) は、比較接辞の異形態について、1) 形容詞が r で終わるなら -tArAx が付く (例 : šalpar-tarax 「よりぶかぶかの」、sėmsēr-terex 「より厚かましい」、2) y, l, n で終わる形容詞にはいずれの異形態も付きうる (例 : numay-rax / numay-tarax 「より多い」、šāmāl-rax / šāmāl-tarax 「より軽い／簡単な」、věškěn-rex / věškěn-terex 「より高慢な」、3) 他の音で終わる形容詞には -rAx が付く (例 : pečěk-rex 「より小さい」、xura-rax 「より黒い」) と述べている。

Pavlov (2014b: 127) は、比較接辞の異形態について、1) 現代文語の規範によると、異形態 **-rAx** は母音または無声子音で終わる語に後続する (例: **sarlaka-rax** 「より広い」、**šamrāk-rax** 「より若い」、**šēnē-rex** 「より新しい」、**xāruš-tarax** 「より危ない」、**layāx-tarax** 「よりよい」、**pīlak-tarax** 「より甘い」、**pīsāk-tarax** 「より大きい」) のような形式は方言的であるとみなされるべきである、2) 形容詞が共鳴音 **y, l, m, n** で終わる場合、文語では **-rAx** も **-tArAx** も用いられうる (例: **numay-rax / numay-tarax** 「より多い」、**saxal-rax / saxal-tarax** 「より少ない」、**tarān-rax / tarān-tarax** 「より深い」、**čuxān-rax / čuxān-tarax** 「より貧しい」)、3) 形容詞が共鳴音 **-r** で終わる場合、常に異形態 **-tArAx** を用いる (例: **yīvār-tarax** 「より重い／難しい」、**xayar-tarax** 「より邪悪な」)、一部の著者がこの位置で異形態 **-rAx** を使用している (例: **xayar-rax** 「より邪悪な」、**xastar-rax** 「より熱心な」) が、これは文語の規範に反する、と記述している。

Pavlov (2014b: 127-128) は、異形態 **-tArAx** の起源についても記述している。まず Pavlov (2014b: 127) は、何人かの研究者が **-rAx** の前に現れる付加的な音節 **-tA** は、接辞頭と語幹末の 2 つの **r** が連続するのを防ぐために挿入された緩衝物である (例: **načar-ta-rax** 「より悪い」) と考えていることについて言及している。一方、**-r** で終わる動詞語幹に単純過去 **-R** が付く場合 (例: **šīr-t-ām** 「私は書いた」) および **-r** で終わる名詞に位格／奪格 **-RA / -RAn** が付く場合 (例: **avār-ta / avār-tan** 「深みで／深みから」)、接辞の前に緩衝物は現れないとし、この理由を説明している。Pavlov (2014b: 128) は Kotvič (1962: 147-148) の記述をもとに、キルギス語やカザフ語などには **-dai**、東トルキスタンの方言には **-dar** のような比較接辞があると述べている<sup>6</sup>。このことから Pavlov (2014b: 128) は、古チュヴァシ語では **-rAx** とともに **-r** で終わる語の後で異形態 **-dAr** も用いられていた可能性がある」と主張している。Pavlov (2014b: 128) によると、接辞末の **r** が脱落し位格と同形となったことにより、比較の意味をはっきりさせるため、**-dA** の後ろに異形態 **-rAx** が付加されるようになったという。

#### 1.4. 問題提起

過去接辞については、いずれの先行研究も **/r, l, n/** で終わる語の後には **-t** が現れ (三人称の場合は **-č**)、それ以外の場合は **-r** が現れるとしている。位格・奪格接辞について、Krueger (1961) は、**/r, l, n/** で終わる語の後には **/t/** 始まりの異形態 **-tA, -tAn** が現れ、それ以外の音で終わる語には **/r/** 始まりの異形態 **-rA, -rAn** が現れるとしている。一方、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) は、**/l, n/** で終わる一部の語には **/r/** 始まりの異形態も現れうるとしている。Pavlov (2014a, b) は、**/l, n/** で終わる語のうち固有語には **/t/** 始まりの、借用語にはいずれの異形態も (多くの場合 **/r/** 始まりの異形態が) 現れると述べている。比較接辞について先行研究は、**/r/** で終わる語には **/t/** 始まりの異形態 **-tArAx** が現れ、**/l, n, y, m/** (Pavlov (2014b) はこれら 4 つの子音を挙げているが、Krueger (1961) は **/l, n/**、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) は **/l, n, m/** を挙げている) で終わる語にはいずれの異形態も現れることがあり、その他の音で終わる語には **/r/** 始まりの異形態 **-rAx** が現れるとしている。

<sup>6</sup> ただし、**-dar** のような形式は参照元の Kotvič (1962: 147-148) には挙がっていない。

しかし、いずれの接辞についても、揺れが見られる場合の異形態の出現頻度に関する記述は見当たらない。位格・奪格接辞の例を観察すると、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) が述べるように、/l, n/ で終わる語の場合には /r/ 始まりの異形態もみられるが、/r/ 始まりの異形態は特に /n/ 終わりの語でよく見られるように思われる。さらに、Pavlov (2014a, b) の記述に反し、固有語でも専ら /r/ 始まりの異形態が現れるものも見られる。比較接辞の例を観察すると、Pavlov (2014b) が挙げているように、語幹が /l, n, y, m/ 以外の音で終わる一部の語に -tArAx が付いている例も見られる。

筆者は、以上の問題点を解決するにはコーパスを用いた定量的調査によって異形態の出現頻度を明らかにすることが有効であると考えた。

## 2. 調査

本節では、2.1 節で調査方法について述べ、2.2 節で調査結果を示す。

### 2.1. 調査方法

発音が表記に反映されている<sup>7</sup>との前提のもと、オンラインコーパス Čävaš čelxin ikčelxellë süpsi<sup>8</sup> [チュヴァシ語二言語コーパス] を用いて、以下の手順で調査を行った。

過去接辞は、検索窓に /r, l, n/ および他の音で終わる動詞語幹に過去接辞 -r または -(č) および人称標識<sup>9</sup>を後続させた形式を、位格・奪格接辞は、検索窓に /r, l, n/ および他の音で終わる名詞・代名詞に位格・奪格接辞の /r/ または /l/ で始まる異形態を後続させた形式を、比較接辞は、検索窓に /r, l, n, y, m/ および他の音で終わる形容詞・副詞に比較接辞 -rAx または -tArAx を後続させた形式をキリル文字で入力して検索し、それぞれの異形態が付加した語形のヒット数を調べた（一部のデータは目視で確認した検索ノイズの数を除外している）。

調査対象の語は、基礎語彙を中心とした使用頻度の高いものとし、その選定の際には、第1節でこれまで挙げた先行研究や、チュヴァシ語のswadesh・リストを参考にした。ただし、それらに載っている語だけでは十分ではないため、その他の語も扱った。調査対象の語の選定は、特定の語末音を持つ語の中から使用頻度の高いものを客観的な基準に基づいて選ぶことが困難である（調査対象の接辞が付いた語形の使用頻度は、その語形を入力しなければ分からない）ことから、ある程度恣意的にならざるを得なかったことをおことわりしておく。調査結果には、調査した様々な語のうち、異形態の出現頻度のパターンごとに特にヒット数の多かったものを代表として挙げる。

<sup>7</sup> チュヴァシ語のキリル文字正書法は発音に忠実であり、/r/ を p ではなく r で綴る、/l/ を r ではなく p で綴る、というような事例は存在しない。

<sup>8</sup> 総語数約 1168 万語（2022 年 1 月 11 日現在）のタグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。2022 年 1 月現在、更新作業（新テキストの追加、ロシア語訳付け作業）が行われており、更新内容は即時反映される。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。基本的に文語のコーパスであるが、文学作品中の台詞など、口語的な表現も多く含まれている。

<sup>9</sup> ただし、過去接辞＋二人称複数標識が三人称命令接辞と同形になる場合があるため、二人称複数標識は除外する（例：kil-t-ër「君達は来た」、kil-t-ër「彼／彼女が来るように」）。類似の理由により、母音終わりの動詞語幹に関して調査する際は、二人称単数標識も除外する。

## 2.2. 調査結果

調査の限りでは、いずれの接辞の場合も /r/ 終わりの語に /r/ 始まりの異形態が現れている例は見られなかった。位格・奪格接辞は /l, n/ 終わりの一部の語で、比較接辞は /l, n, y, m/ およびその他の音で終わる一部の語で、/r/ 始まりの異形態も /r/ 始まりの異形態も見られた。以下、2.2.1 節で過去接辞、2.2.2 節で位格・奪格接辞、2.2.3 節で比較接辞についての調査結果を詳述する。

### 2.2.1. 過去接辞

過去接辞は、調査の限りでは /r, l, n/ で終わる語では必ず -t(三人称接辞の前では -č)が、それ以外の音で終わる語では必ず -r が現れており、揺れが見られなかった。主な語に関する調査結果は、以下の表 1 に示す通りである（表中の V は母音、O は阻害音。本稿の表では、より大きいヒット数を太字で示し、見やすさのために一部網掛けを施した）。

表 1：過去接辞についての調査結果

語末音	動詞		-r	-t(č)	合計
/r/	lar-	座る	0	<b>9385</b>	9385
	kur-	見る	0	<b>5880</b>	5880
/l/	pul-	である	0	<b>17464</b>	17464
	kil-	来る	0	<b>6857</b>	6857
/n/	purān-	住む	0	<b>830</b>	830
	man-	忘れる	0	<b>245</b>	245
他	te-	言う	<b>41550</b>	0	41550
	kay-	行く	<b>11788</b>	0	11788

### 2.2.2. 位格・奪格接辞

位格・奪格接辞は、/r/ 終わりの語では /r/ 始まりの異形態のみが、/l, n/ 終わりの語では /r/ 始まりの異形態も /r/ 始まりの異形態も、それ以外の音で終わる語では /r/ 始まりの異形態のみが見られた。主な語に関する調査結果は、以下の表 2 の通りである。

表 2：位格・奪格接辞についての調査結果

語末音	名詞		-rA/-rAn	-tA/-tAn	合計
/r/	kākār	kākār-Re	0	<b>46</b>	46
	胸	kākār-Ren	0	<b>132</b>	132
/l/	śul	śul-Ra	8	<b>3331</b>	3339
	道／年	śul-Ran	104	<b>1007</b>	1111
/n/	čun	čun-Ra	<b>70</b>	7	77
	心	čun-Ran	60	<b>899</b>	959
他	xula	xula-Ra	<b>1514</b>	0	1514
	街	xula-Ran	<b>679</b>	0	679

なお、/l/ 終わりの語と /n/ 終わりの語については、語によって異形態の出現頻度が異なっていることが分かった。以下、/l/ 終わりの語と /n/ 終わりの語に関する調査結果を詳述する。

### /l/ 終わりの語

/l/ 終わりの語の場合、調査した語の多くにおいて /t/ 始まりの異形態の方が著しく多く見られたが、一部の語では /r/ 始まりの異形態の方が多く見られた。主な語に関する調査結果は、以下の表 3 に示す通りである。

表 3：位格・奪格接辞についての調査結果（/l/ 終わりの語）

名詞		-rA/-rAn	-tA/-tAn	合計
šül 上	šül-Re	0	<b>1064</b>	1064
	šül-Ren	0	<b>896</b>	896
yal 村	yal-Ra	0	<b>1731</b>	1731
	yal-Ran	1	<b>594</b>	595
kil 家	kil-Re	0	<b>2602</b>	2602
	kil-Ren	23	<b>641</b>	664
škul 学校	škul-Ra	7	<b>1135</b>	1142
	škul-Ran	1	<b>390</b>	391
šul 道／年	šul-Ra	8	<b>3331</b>	3339
	šul-Ran	104	<b>1007</b>	1111
vokzal 駅	vokzal-Ra	35	<b>45</b>	80
	vokzal-Ran	10	<b>42</b>	52
zal ホール	zal-Ra	<b>325</b>	5	330
	zal-Ran	<b>48</b>	2	50

表 3 に示したように、/l/ 終わりの語では多くの場合、/t/ 始まりの異形態のみが現れるか、/t/ 始まりの異形態の方が多く現れるが、ロシア語からの借用語 *zal* 「ホール」など一部の語では、/r/ 始まりの異形態の方が多く現れる場合もある。

### /n/ 終わりの語

/n/ 終わりの語の場合、全体的に /l/ 終わりの語に比べて /r/ 始まりの異形態の出現頻度が高いことが分かった。なお、/n/ 終わりの語に関しては、名詞と代名詞に分けて調査結果を示す。まず、名詞について述べる。主な語に関する調査結果は、以下の表 4 に示す通りである。



表 4：位格・奪格接辞についての調査結果 (/n/ 終わりの名詞)

名詞		-rA/-rAn	-tA/-tAn	合計
vīrān 場所	vīrān-Ra	0	<b>2927</b>	2927
	vīrān-Ran	0	<b>2020</b>	2020
vārman 森	vārman-Ra	0	<b>1360</b>	1360
	vārman-Ran	2	<b>466</b>	468
rajon 郡	rajon-Ra	41	<b>556</b>	597
	rajon-Ran	13	<b>105</b>	118
čun 心	čun-Ra	<b>70</b>	7	77
	čun-Ran	60	<b>899</b>	959
šin 人	šin-Ra	<b>62</b>	6	68
	šin-Ran	<b>496</b>	277	773
vagon 車両	vagon-Ra	<b>85</b>	25	110
	vagon-Ran	<b>54</b>	20	74
Čávaš Yen チュヴァン共和国	yen-Re	<b>341</b>	0	341
	yen-Ren	<b>34</b>	0	34

表 4 に示したように、/n/ 終わりの語では、/t/ 始まりの異形態のみが現れる場合や、/t/ 始まりの異形態の方が多く現れる場合もあれば、/r/ 始まりの異形態の方が多く現れる場合や、/r/ 始まりの異形態のみが現れる場合もある。

次に、代名詞について述べる。主な語に関する調査結果は、以下の表 5 に示す通りである。

表 5：位格・奪格接辞についての調査結果 (/n/ 終わりの代名詞)

代名詞		-rA/-rAn	-tA/-tAn	合計	
指示 代名詞	śak(ă) これ	śakān-Ra	0	<b>1861</b>	1861
		śakān-Ran	0	<b>521</b>	521
	śav(ă) それ	śavān-Ra	1	<b>1603</b>	1604
		śavān-Ran	0	<b>589</b>	589
	ku これ	kun-Ra	3	<b>20253</b>	20256
		kun-Ran	59	<b>3092</b>	3151
	vāl それ	un-Ra	265	<b>20437</b>	20702
		un-Ran	3162	<b>21295</b>	24457
人称 代名詞	esir 君達	sirēn-Re	0	<b>30</b>	30
		sirēn-Ren	0	<b>583</b>	583
	epir 私達	pirēn-Re	1	<b>29</b>	30
		pirēn-Ren	1	<b>675</b>	676
	esě 君	san-Ra	<b>99</b>	1	100
		san-Ran	<b>1176</b>	26	1202

	epě 私	man-Ra	191	0	191
		man-Ran	2396	38	2434
他	měň 何	měň-Re	268	11	279
		měň-Ren	550	95	645

měň「何」以外はいずれも、/n/ 終わりの斜格語幹（属格形と同形）に位格・奪格接辞が後続する。指示代名詞は全体的に /t/ 始まりの異形態の方が優勢であり、/t/ 始まりの異形態のみが現れる語もある。人称代名詞は、複数の場合は /t/ 始まりの異形態の方が著しく多い一方、単数の場合は /r/ 始まりの異形態の方が著しく多い。

### 2.2.3. 比較接辞

比較接辞は、/r/ 終わりの語では /t/ 始まりの異形態 -tArAx のみが、/l, n, y, m/ およびその他の音（母音・阻害音）で終わる一部の語では /r/ 始まりの異形態 -rAx も /t/ 始まりの異形態 -tArAx も見られた。主な語に関する調査結果を、以下の表 6 に示す。

表 6：比較接辞についての調査結果

語末音	形容詞・副詞		-rAx	-tArAx	合計
/r/	yivär	重い	0	525	525
	načar	悪い	0	192	192
/l/	saxal	少ない	187	545	732
	šamāl	簡単な	278	504	782
	usal	邪悪な	19	66	85
/n/	avan	良い	372	635	1007
	ayvan	繊細な	19	36	55
	puyan	豊かな	37	25	62
	xulān	厚い	68	13	81
	těplěn	詳しく	192	5	197
/y/	numay	多い	260	32	292
	samay	悪くない	7	1	8
	čīlay	かなりの	10	0	10
/m/	těttēm	暗い	130	5	135
	těksēm	くすんだ	221	5	226
	vārām	長い	134	1	135
	kičem	退屈な	48	0	48
V	šemsē	柔らかい	83	2	85
	xītā	かたい	1568	0	1568
	vatā	年配の	111	0	111
	xāvārt	速い	2994	2	2996

O	čas	はやく	1209	1	1210
	šívāx	近い	896	1	897
	layāx	良い	3081	0	3081

表 6 に示した結果から、1) /l/ 終わりの語は -tArAx の出現頻度の方が高いこと、2) /n/ 終わりの語はどちらの異形態の出現頻度が高いかが語によって異なること、3) /y, m/ 終わりの語では -rAx の出現頻度の方が著しく高いこと、4) /l, n, y, m/ 以外の音で終わる一部の語にも -tArAx が付いた例がわずかに見られること、が分かる。

### 3. 考察

本節では以下、3.1 節で調査結果に関する考察、3.2 節で共時的説明および通時的発展に関する考察を行う。

#### 3.1. 調査結果に関する考察

調査結果から、語末音による /t/ 始まりの異形態の全体的な出現頻度は、「/r, l, n/ > 他」(過去接辞)、「/r/ > /l/ > /n/ > 他」(位格・奪格接辞)、「/r/ > /l/ > /n/ > /y, m/ > 他」(比較接辞)であること、異形態の出現頻度は語によって異なっており、音韻的・意味的な規則性が見られないこと、が示唆される。調査結果から推察される、語末音による /t/ 始まりの異形態の大まかな出現頻度を以下の図 1 に示す。



図 1：語末音による /t/ 始まりの異形態の大まかな出現頻度

/t/ 始まりの異形態の出現頻度は、語末音の /r/ との音声的類似性の高さ(図 2)と相関していると言える。過去接辞は、/r/ と同じく歯茎共鳴音である /r, l, n/ の後でのみ -t が現れる。位格・奪格接辞も同様に歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で /t/ 始まりの異形態が現れるが、/l, n/ の後では /r/ 始まりの異形態も現れうる。/t/ 始まりの異形態の出現頻度は鼻音 /n/ の後に比べて、/r/ と同じく流音である /l/ の後で高い。比較接辞は、/r/ と同じく共鳴子音である /r, l, n, m, y/ の後で、その他の音に比べて /t/ 始まりの異形態 -tArAx の出現頻度が高いが、特に歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後でより高い。-tArAx の出現頻度は、鼻音 /n/ の後に比べて、/r/ と同じく流音である /l/ の後でより高い。よって、語末音の /r/ との音声的類似性が高いほど /t/ 始まりの異形態の出現頻度が高いと言える<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> 母音以外は聞こえ階位 (sonority rank) が関係しているようにも見える。しかし、いずれの接辞の場合も、

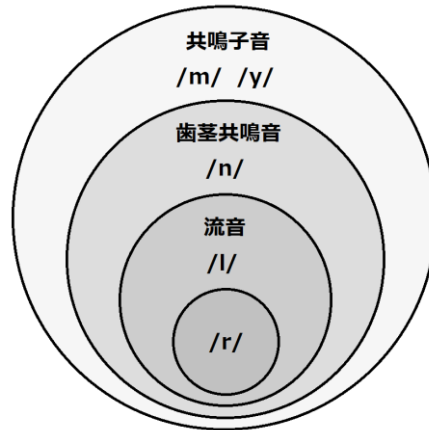


図2：/r/ との音声的類似性

以下、調査結果と他のチュルク諸語との対照に基づき、共時的な説明と、通時的発展の考察を行う。

### 3.2. 共時的説明および通時的発展に関する考察

共時的には、分布の広さから過去接辞および位格・奪格接辞の基本形は /r/ 始まりであり、/t/ 始まりの異形態は、歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で（位格・奪格接辞は /l, n/ の後で部分的に）/r/ が /t/ に異化をを起こしたものとみることができる。

一方、他の多くのチュルク諸語で過去接辞および位格・奪格接辞は /d, t/ 始まりであることに加え、揺れは見られない。例えば、トルコ語（オグズ語群）では母音・有声音の後で /d/ 始まりの、無声音の後で /t/ 始まりの異形態が現れ、揺れは見られない（例：**gel-di**「来た」、**git-ti**「行った」、**Ankara-da / Ankara-dan**「アンカラで／アンカラから」、**ev-de / ev-den**「家で／家から」、**otobüs-te / otobüs-ten**「バスで／バスから」）。

チュヴァシ語の過去接辞および位格・奪格接辞における頭子音交替は、/r/ が現れる点、位格・奪格接辞では /l, n/ の後で揺れが見られる点で特異である。通時的には、後にチュヴァシ語に発展した言語の過去接辞および位格・奪格接辞の頭子音で /d/ > /r/ の変化（ロータシズム）が起こった可能性がある<sup>11</sup>。その場合、まず母音間で起こり、その後広がったが、

語末音が /n/ の場合と /m, y/ の場合で /t/ 始まりの異形態の出現頻度に大きな差が見られる。/n/ と /m/ の聞こえ度の差は小さくなく、/y/ は /n/ よりも聞こえ度が高い。よって、聞こえ度の差で /t/ 始まりの異形態の出現頻度の差を説明することは難しい。

<sup>11</sup> チュヴァシ語に /d/ は存在しないが（[d] は /t/ の異音）、後述のようにチュルク祖語の過去接辞と位格・奪格接辞の再構形として /d/ 始まりの形がたてられており、ロータシズムが起こったと思われる時代には /d/ が存在した可能性がある。庄垣内（1989: 873）によると、古代チュルク語の -d にチュヴァシ語の -r が対応する（例：古代チュルク語 **qod-**：チュヴァシ語 **xur-**「置く」）が、これは（チュヴァシ語の祖先またはそれに近縁とされる）ヴォルガ・ブルガール語で 11 世紀後半から 13~14 世紀の間に起こったロータシズム（d > δ > z > r の過程を経た）の結果であるという。Tekin（1988: 38）は、ヴォルガ・ブルガール語（13~14 世紀）の奪格接辞は -ran/-ren ~ -tan/-ten であったとしており（例：**dunyā-ran**「世界から」）、Erdal（1993: 68, 93, 138）は、ヴォルガ・ブルガール語の過去接辞と位格接辞が、記録されている /t/ 始まりの形（例：**vel-ti**「彼は死んだ」、**jäl-ta**「年に」）に加え、/r/ 始まりの形も持っていたと推測している。これらの接辞の頭子音においてもロータシズムが起こったとすれば、これも 13~14 世紀より前であったと考えられる。

歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後では接辞頭の /t/ が生き残ったと考えることができる<sup>12</sup>。

この説は、本稿のデータからも支持される。位格・奪格接辞に関するデータ (2.2.2 節を参照) を見ると、多くの代名詞をはじめとする固有語には /t/ 始まりの異形態のみが現れるものがある一方、ロシア語からの借用語には /r/ 始まりの異形態も /t/ 始まりの異形態も現れ、/r/ 始まりの異形態の出現頻度の方が高いものもある (2.2.2 節の表 3, 4 を参照)。これは、これらの借用語がロータシズムとその結果 /r/ 始まりの異形態の分布が拡大した後に借用されたためであると考えられる。複数接辞と一部の所有接辞に後続する位格・奪格接辞の異形態が /t/(t̥) 始まりであること (1.2 節を参照)、チュルク祖語の過去接辞および位格・奪格接辞の再構形として /d/ 始まりの形 (過去 \*-dI、位格 \*-dA、奪格 \*-dAn) が挙げられている (Róna-Tas 1998: 73) ことも、上述の説を支持する。

一方、比較接辞は、接辞頭子音が交替するわけではないという点で過去接辞および位格・奪格接辞とは大きく異なる。1.3 節で述べたように、Pavlov (2014b) は、-rAx の前に現れる付加的な音節 tA が、接辞頭と語幹末の 2 つの r が連続するのを防ぐために挿入された緩衝物であるとの説に言及し、これが過去接辞および位格・奪格接辞の前には現れない理由を考察している。Pavlov (2014a) は、Kotvič (1962: 147-148) に基づいて、一部のチュルク諸語に -dar のような比較接辞があるとし、これをもとに異形態 -tArAx が -dAr>-dA>-dA-rAx のように発展したとしている。しかし、-dar のような形式は 1.3 節で述べたように、参照元の Kotvič (1962: 147-148) には挙がっていない<sup>13</sup>。本稿では、過去接辞および位格・奪格接辞では頭子音が交替する一方で、比較接辞では緩衝音節が挿入された理由について、以下のような通時的仮説を提示する。

上述のように、後にチュヴァシ語に発展した言語の過去接辞および位格・奪格接辞の頭子音では、/d/ > /r/ の変化 (ロータシズム) が起こった (歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で接辞頭の /t/ が生き残った) と考えられる。一方、比較接辞は、他の多くのチュルク諸語でも -rAx に類似の形式が現れる (例: タタール語 -rAK、ウズベク語 -roq) ことから、-tArAx は形態素境界で /r/ が連続するのを防ぐために緩衝音節 tA が挿入されて形成されたと考えられる。この緩衝音節は、-dAr に由来するのではなく、-rAx の -rA の部分がダミーとして (ただし、/r/ が /t/ になって) 現れたものであろう<sup>14</sup>。緩衝音節の挿入は、過去接辞および位格・奪格接辞においてロータシズムが起こり、/r/ 始まりの異形態の分布が拡大した後に起こったと筆者は考える。/r/ 始まりの異形態の分布拡大により、/t/ 始まりの異形態の分布が /r, l, n/ の

<sup>12</sup> Erdal (1993: 138) は、古代チュルク語 (オルホン碑文) の /d/ 始まりの接辞の頭子音は、/r, l, n/ の後で T にあたるルーン文字で書かれ (おそらく [d] と読まれ)、他の場合は D にあたるルーン文字で書かれた (おそらく [ð] と読まれるべき)、としている。Erdal (1993: 68) によると、そのような接辞に過去接辞がある。Erdal (1993: 138) は、ヴォルガ・ブルガール語にもそのような接辞 (/r, l, n/ の後で /t/ 始まりの形が現れており、その他の場合に /r/ 始まりの形が現れると推測される、過去接辞と位格接辞) があるとして、いつどのように [ð] が [r] になったのかは答えるのが難しい問題だとしている。

<sup>13</sup> Johanson (2002: 81) によると、イランのチュルク諸語ではペルシャ語の比較接辞 -tar が用いられるといい、イランにも多くの話者がいるアゼルバイジャン語の例 az-tär「より少ない」を挙げている。Pavlov (2014a) にある -dar が仮にこの -tar であるとしても、ペルシャ語圏から遠く離れた地域で話されるチュヴァシ語で、かつて -tar が -rAx と並行して用いられていたとは考えにくい。

<sup>14</sup> ダミーの音節は、隣接する音節もしくはその一部と音形が類似しているだろうという考えに基づく仮説である。ただし、類似の振る舞いをする接辞は他には見られず、この説の妥当性については今後の検証が必要である。

後のみになると、/r, l, n/ の後には /r/ ではなく /t/ で始まる異形態が現れると意識されるようになった。その結果、/t/ で始まる緩衝音節が挿入された異形態 -tArAx が出現した。

この説は、-tArAx が /r, l, n/ 以外で終わる語にも現れうるという本稿のデータ (2.2.3 節を参照) からも支持される。/t/ 始まりの異形態が /r, l, n/ の後のみに残存した過去接辞および位格・奪格接辞とは異なり、比較接辞の /t/ 始まりの異形態 -tArAx は改新形式 (innovation) であり、その分布が拡大することを完全に防ぐような音声的制約はない。よって、過去接辞および位格・奪格接辞とは異なり、/t/ 始まりの異形態が /r, l, n/ 以外で終わる語にも現れうるのであろう。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿の意義として、1) 定量的調査によって、過去接辞、位格・奪格接辞、比較接辞の異形態の出現頻度を、使用頻度の高い語に関して詳細に示したこと、2) 揺れが見られる場合、異形態の出現頻度は語や語末音によって異なり、語末音による異形態の出現頻度は、語末音の /r/ との音声的類似性と相関していることを示したこと、3) 過去接辞および位格・奪格接辞の頭子音でロータシズムが起こった可能性と、比較接辞における緩衝音節の挿入がロータシズムよりも後に起こった可能性を示したこと、が挙げられる。

調査対象の語の選定はある程度恣意的であったため、今後はさらに多くの語を調査すること、方言差や個人差があるか、文体の違いや (学校教育などによる) 規範意識が関わっているかについても調べる必要がある。また、過去接辞、位格・奪格接辞、比較接辞の間で、語末音による /t/ 始まりの異形態の出現頻度のパターン (図 1) に相違が見られる理由を説明すること、-tArAx の緩衝音節 -tA が、-rAx の -rA の部分がダミーとして (ただし、/t/ が /t/ になって) 現れたものであるという仮説を検証することも今後の課題である。

#### 参考文献

- Clark, L. (1998) Chuvash. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 434-452. London, New York: Routledge.
- Erdal, M. (1993) *Die Sprache der wolgabolgarischen Inschriften* (Turcologica 13). Wiesbaden: Harrassowitz.
- Johanson, L. (2002) *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. Richmond: Curzon.
- Kotvič, V. (1962) *Issledovanija po altajskim jazykam*. Moskva: Izdatel'stvo inostrannoju literatury.
- Krueger, J. (1961) *Chuvash Manual. Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 7, The Hague: Mouton.
- Pavlov, I. P. (2014a) *Sovremennyj Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 1: Morfemika, morfonologija, slovoobrazovanie*. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Pavlov, I. P. (2014b) *Sovremennyj Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.

- Róna-Tas, A. (1998) The Reconstruction of Proto-Turkic and the Genetic Question. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 67-80. London, New York: Routledge.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čävaš čělxi: čävaš filologi fakul'tečën studenčësem valli xatërlenë vërenü këneki*. [チュヴァシ語：チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čävaš këneke izd-vi.
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュヴァシ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』 第2巻. 東京：三省堂. 869-975.
- Tekin, T. (1988) *Volga Bulgar kitabeleri ve Volga Bulgarcası*. [ヴォルガ・ブルガール碑文とヴォルガ・ブルガール語] Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 調査資料

- Chuvash Swadesh List ([https://en.wiktionary.org/wiki/Appendix:Chuvash\\_Swadesh\\_list](https://en.wiktionary.org/wiki/Appendix:Chuvash_Swadesh_list)) [最終閲覧日：2022/1/11]
- Čävaš čělxin ikčëlxellë šüpši [チュヴァシ語二言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日：2022/1/11]

## On the Alternation of /r/ Beginning Allomorphs and /t/ Beginning Allomorphs in Chuvash

Yuto HISHIYAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

The initial consonant of some Chuvash suffixes (the past tense suffix *-R*, the locative case suffix *-RA*, and the ablative case suffix *-RAn*) alternates between /r/ and /t/ (e.g. *kay-r-äm* ‘I went’, *kil-t-ëm* ‘I came’, *šiv-ra* ‘in water’, *tăvar-ta* ‘in salt’, *külě-ren* ‘from lake’, *vărman-tan* ‘from forest’). The comparative suffix alternates between the short form *-rAx* starting with /r/ and the long form *-tArAx* starting with /t/ (e.g. *xitre-rax* ‘more beautiful’, *načar-tarax* ‘worse’).

On the past tense *-R*, every previous research describes that the allomorph *-t* (*-č*) appears after verb stems ending in /r, l, n/, and *-r* appears in other cases. On the locative *-RA* and ablative *-RAn*, some previous research describe that the allomorphs *-tA*, *-tAn* appear after nouns ending in /r, l, n/, and *-rA*, *-rAn* appear after nouns ending in other phonemes. Other previous research describe that the allomorphs *-rA*, *-rAn* may also appear after several nouns ending in /l, n/. On the comparative *-rAx*/*-tArAx*, previous research describe that the allomorph *-tArAx* appears after adjectives ending in /r/, either *-rAx* or *-tArAx* can appear after adjectives ending in /l, n, y, m/, and *-rAx* appears after adjectives ending in other phonemes. However, the frequency of the appearance of allomorphs starting with /r/ or /t/ is not described, in cases where either of them can appear.

Based on the results of a quantitative survey using a web-corpus and contrastive research with other Turkic languages, this paper argues the following two points. First, the overall frequency of the appearance of the /t/-beginning allomorphs caused by the final sound of the preceding word is “/r, l, n/ > others” (the past suffix), “/r/ > /l/ > /n/ > others” (the locative and ablative suffixes), and “/r/ > /l/ > /n/ > /y, m/ > others” (the comparative suffix). These tendencies correlate with the phonetic similarity of the final phoneme of the preceding word to the phoneme /r/. Second, the following diachronic developments may have occurred in Chuvash. In many other Turkic languages, the forms of the past, locative and ablative suffixes begin with /d, t/ (e.g. Turkish *-dV/-tV*, *-dA/-tA*, *-dAn/-tAn*). So, it is possible that the sound change from /d/ to /r/ (rhotacism) occurred in the initial consonants of the corresponding suffixes of the language later developed into Chuvash (although /t/ survived after the alveolar sonorants /r, l, n/). On the other hand, the forms of the comparative suffixes of other Turkic languages are similar to Chuvash *-rAx* (e.g. Uzbek *-roq*, Tatar *-rAK*). So, it is possible that *-tArAx* was formed by inserting a buffer syllable *tA* to prevent clustering of /r/ after the rhotacism. These hypotheses are also supported by the data presented in this paper.

(ひしやま・ゆうと boltwatts@gmail.com)